

## Paper Plane

空箱のロボットからも卒業し、小学生となった僕はプラモデルへとステップアップし、モーターの使い方なども覚え、高学年になるころには、今度は木箱のリモコンロボットなどを作っていました。テレビでは、ロボット博士などといわれた相沢氏のラジコンロボットが流行っていましたが、小学生には高価でとても手が出ず、もちろん知識もなく指をくわえて見ているだけでした。そして中学生になる頃には、メカ好きの少年が誰でも一度は辿る道として、当然のように飛行機へと興味が移っていきました。そこでも当然ラジコンなどは夢のまた夢で、もっぱら模型雑誌にのっているハンドグライダーなどを作っていました。紙製のグライダーから木製のグライダーへとステップアップしてはいたのですが、近所には十分飛ばせる広い場所もなく、家々の屋根に不時着してしまうケースも多く、コストの安いペーパーグライダーがメインでした。

そんなある日、学校帰りに近所の文房具屋で偶然紙飛行機のスケールモデル集を見つけ、早速買って帰りました。それは第二次世界大戦で活躍した世界各国の戦闘機、メッサーシュミット、スピットファイア、ムスタング、ゼロ戦、飛燕などを中心に十機種がセットになったものでした。とりあえず一機を作ってみたのですが、紙なのにスケール観もありバランスさえとればそれなりに飛ばすこともでき、すぐに夢中になってしまいました。しかしそのまま作ってしまうとすぐに終わってしまい、また買うといってもそれなりの値段がするので、そこで一計を案じたのでした。まずトレーシングペーパーに形を写し取り、それをカーボン紙を使ってケント紙に複写して作りたいだけ作るという作戦にでました。次々に作っては飛ばしているうちに、作り方もほぼ理解し、ちょっと改良して類似の機種を作ったり、塗装を変えてみたりして楽しんでいました。

そうこうしているうちに、当時最も好きだった世界初のジェット戦闘機メッサーシュミット Me262 を作ってみようと思い立ちました。セットの中のメッサーシュミットを改良し、両翼の下にオリジナルのジェットエンジンなどを取り付け、なかなかいい出来だと自己満足していました。しかし形ができると飛ばしてみたくなったのでした。プロペラ機には、ゴム動力をつけプロペラを回しながら滑空させて遊んでみて、紙の機体は重すぎて動力飛行は無理だとわかっていたので、ジェット推進ならと思ったのでした。当時ロケッティという模型飛行機用の固形燃料のロケット式推進器があったのです。アルミ製のタンクの中に固形燃料を入れ導火線で点火すると、タンク後方のノズルから燃焼ガスが噴出し、それ



を推進力にするといったものでした。当初その燃料だけを使いタンクを自作しようとしたのですが、しょせん中学生にも加工できるプラスチックや木では、そんな熱や圧力に耐えられる軽量容器は作れず、それならば飛ばすだけでもとロケッティを直接つけて飛ばしてみることになりました。機体を自作のカタパルトにセットし、人の来ないのを見計らって点火すると、すばらしい勢いで飛び上がりました。しかし同時に血の気が引きました。その勢いで飛んでいってどこかの家にも飛び込んだら大変なことになると気がついたのです。しかし幸いにも7～8m 飛んだところで突然主翼の付け根から二つに折れ、万歳をしたようになかっこうであえなく墜落したのです。当然各部には補強がしてあったのですが、しょせん紙飛行機ということでロケッティの推力に耐えられなかったということでしょう。また機体がメッサーシュミットだったのが幸いして主翼が折れて墜落したからよかったものの、もしジェット戦闘機のように後退翼や三角翼だったりしたらと肝を冷やしました。

その後は、これに懲りて飛ばすのは手投げレベルとし、少しずつオリジナルなものへと移行していったのです。そんな時 飛行機の雑誌に「紙飛行機野郎会？」会員募集という記事を見つけすぐに入りたいとは思ったのですが、中学生だったこともありなかなか決心がつかず、やっと思いついて入会を申し込んだときには、すでに募集は締め切ったとの連絡だけが帰ってきました。その後受験もあり紙飛行機からもいつの間にか遠ざかってしまいました、それが僕のペーパーモデルとの初めての出会いだったように思います。

## 写真の説明

### 写真1：十八試局地戦闘機「震電」

メッサーシュミット Me262 は手に入らなかったため、次に好きだった震電を集文社さんのペーパーモデルミニシリーズの中から作ってみました。震電は、飛行速度の向上と、重武装による迎撃力の向上を目指して作られた唯一の先尾翼機です。試験飛行には成功したものの、三日後には終戦となり、ひのめを見なかった幻の戦闘機です。そのユニークな姿もさることながら、そんなお話も含めて好きだった機体です。